

## 近代沖縄漢詩研究への展望

著者	平良 妙子
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	26
ページ	33-50
発行年	2021-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00134715">http://hdl.handle.net/10097/00134715</a>

## 近代沖縄漢詩研究への展望

平良 妙子

### はじめに

1879年(明治12)3月27日、明治政府は処分官の松田道之を通して、警官・軍隊を動員し武力のもと首里城の明け渡しを敢行して廃藩置県を行ない、ここに約500年間続いた琉球王国は滅び、沖縄県が設置された。これが、沖縄における近代の始まりである。

琉球王国時代、琉球士族の子弟達は、国内では明倫堂や国学で、また、中国へ留学して国子監や福州琉球館において漢詩文や中国文化・技術について学習していた。さらに、冊封朝貢体制のもと、中国のみならず朝鮮やベトナムの人々との間の交流、そして「江戸立ち」による日本の漢学者との交流をも通して、漢詩文文化は育まれ18世紀に大きく花開いた。

しかし、1879年の「琉球処分」以降、社会体制や教育体制が激変し、それまでの東アジアの国々との交流も途絶え、詩作を行なう場も失われた。ただ、漢詩文文化は失われたわけではなく、後に雑誌や新聞などのメディアへと詩作の場を移し、それらメディアの普及とともに漢詩結社が結成され、明治40年代に再び隆盛期を迎えた。

琉球王国時代の漢詩文の研究に関しては、「琉球漢詩」という分野を切り拓いていった上里賢一氏を中心に福建師範大学や北京、台湾等の研究者との交流を通して資料収集が行なわれており、研究蓄積は、ある程度はあると言えよう。しかし、「近代沖縄漢詩」の研究については、遅れを取っていることは間違いない。その要因として、明治・大正期に編まれた沖縄の漢詩人の詩集の大半が第二次大戦の戦禍で失われてしまったことが挙げられる。したがって、明治・大正期に主に作品発表の場となっていたメディアに掲載された作品の収集から始めなければならない。「近代沖縄漢詩」の収集状況などについては次章で具体的に述べるが、現在のところ、まだ一步を踏み出せていないことは否めない。

本稿は、数少ない先行研究を基に、現在の段階で判明している「近代沖縄漢詩」研究の状況を概観し、今後の「近代沖縄漢詩」研究へ向けての課題を確認し、研究の進展を図っていくための布石としたい。

## 1. 「近代沖縄漢詩」先行研究

「はじめに」で述べたように、「近代沖縄漢詩」研究を進めるためには、明治・大正期の雑誌・新聞などのメディアからの作品収集から始めなければならない。雑誌に関しては、沖縄においては明治・大正期には文芸雑誌の刊行はなされておらず、日本の文芸雑誌への投稿が主だったようである<sup>1</sup>。したがって、沖縄における作品発表は主に明治・大正期に沖縄で発刊された新聞紙上においてなされていた。しかし、明治・大正期の新聞そのものが戦禍により消失したとされてきていた。ところが、1963年、それらの一部が国立国会図書館で見つかり、それを機に近代沖縄の文学（琉歌・和歌・俳句・漢詩など）の研究を進めるための一歩を踏み出すことができるようになった。とはいえ、復帰前という政治社会状況のもと、文学に関する大掛かりな研究計画はそれほどなされてはおらず、個々の研究者による発掘にとどまっていた。それは、明治・大正期の沖縄における新聞刊行状況についての研究もそれほど進んではいなかったことにも基づくものと思われる。

近代の沖縄文学に関する大きな研究計画が立てられたのは、平成7・8年度「近代沖縄文学の資料の収集・データベース化」という科学研究費のプロジェクトからであろう。これは連続して平成9・10・11年度「近代沖縄文学の比較ジャンル論に関する基礎的研究」へと繋がり、琉歌・和歌・俳句・漢詩の文学作品資料の収集が行われた<sup>2</sup>。筆者もそのプロジェクトに関わっており、近代沖縄漢詩の収集・データベース作成に参加していた。しかし、現在、琉歌・短歌については収集した作品資料を整理して刊行し、研究のベースとして利用できるものになっているが<sup>3</sup>、残念ながら漢詩に関しては諸事情によりデータの4分の3ほどが失われてしまっている。したがって今後は、まずこの失われたデータの復元から始める必要がある。

「近代沖縄漢詩」に関して、管見の限りで最も古い記述は、真境名安興氏によるものであろう。明治20年代に日本の雑誌へ漢詩を投稿していた源河朝常についての以下のような文章を

---

<sup>1</sup> 下地智子『明治・大正期沖縄の漢詩研究』（琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻、平成21年度博士論文、3～4頁）。

<sup>2</sup> 二つの科学研究費の成果をまとめたものとして以下の二つの報告書が出ている。『平成7・8年度文部科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書「近代沖縄の文学資料の収集・研究とデータベース化」』（琉球大学法文学部、1997年3月）、『平成9・10・11年度文部科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書「近代沖縄文学の比較ジャンル論に関する基礎的研究」』（琉球大学法文学部、2000年3月）。

<sup>3</sup> 仲程昌徳・前城淳子編著『近代琉歌の基礎的研究』勉誠出版、1999年1月。仲程昌徳・知念真理編著『沖縄近代短歌の基礎的研究』勉誠出版、2001年2月。

記している<sup>4</sup>。

放斎詩集は近頃物故された仲吉恩峯氏の筐底から出たもので放斎詩宗自筆の手記<sup>5</sup>本で、近古体二百数首を集めてある。評者は三首ばかりは森槐南で、他は巖城・竹<sup>(ママ)</sup>溪・鶴汀・司空圖・桂巖・香雲・楓橋・敬香・雲潭・天嵌・篁園・湖雲などの名が散見して居る。試みに当時の詩人の名を物色して見ると竹溪は森川竹溪のことで(名鍵、字雲郷、通称鍵蔵、東京人)、楓橋は谷楓橋(名虎、字子雕、通称虎六、越後新発田人、往東京)で敬香は大江敬香のことであろう。又鶴汀の批評は最も多く出て居って村田鶴汀と書いて抹滴した所もある。他の詩人の名は能く知られて居ないが、東都星<sup>□</sup><sup>6</sup>の人々であることは中の叙事を見ると能く分る。

源河放斎は大に未来のあった詩人で首里は桃原の産である。吾々の兄などが漢籍の先生であったといふから、倘し今まで生き延びて居たら所謂老手圓熟の域に達し、幾多の雄篇傑作を出し、沖縄の詩壇を一新したであろうが、惜しいことには天歳を借さず轆轤不遇の裏に名護の客舎で悶死したさうである。(中略)

想ふに彼は独醒の人であったであらう。当時沖縄の社会は守旧派の支配したもので彼の驥足を伸ばすには舞台が余りに小さかったのである。

近代沖縄における漢詩創作に関しては、大まかに以下の三期に分類することができる。

- ①「琉球処分」後に日本から沖縄にやって来た日本官吏との交流や詩会による創作期
- ②日本の漢詩壇や雑誌への投稿を主体とした創作期
- ③沖縄で発刊された新聞への投稿を主体とした創作期

上の眞境名の文章は、②に当たる時期に日本の漢詩壇への投稿が確認できる漢詩人・源河朝常について述べたものである。研究とまでは言い難いが、源河の作品を数首紹介しつつ「独醒の人」と評価をしている。この文章には、当時に日本の漢詩壇への投稿が行われていたこと、日本の漢詩壇の詩人との交流があったことが如実に示されている。

また、上に述べた科学研究費プロジェクトに関わる一人であった岡本恵徳氏は、近代の沖縄漢詩全体の傾向について以下のように述べている<sup>7</sup>。

<sup>4</sup> 眞境名安興「沖縄の漢詩壇を一瞥して—放斎源河朝常を憶ふ—」『眞境名安興全集』第4巻、琉球新報社、1993年2月、181～184頁。掲載紙は不明であるが、大正9年2月1日に掲載された原稿である。

<sup>5</sup> 「沢」の誤りか。

<sup>6</sup> 『眞境名安興全集』凡例によると、「判読不能の場合、□で示した。」とある。

<sup>7</sup> 『沖縄県史』第6巻文化2、沖縄県教育委員会、1975年。

此の時期（筆者注—明治 40 年代）は盛んに行なわれていたが、旧王府時代の延長にすぎず、そこには近代的な文学活動をみることはできない。喜舎場朝賢の主宰する「巢雲吟社」が主として此の時期の漢詩の中心となって作品を発表しているが、日本の文学でそうであったように、古い教養を身に付けた知識人の回顧的な情趣をただよわせる作品にすぎないのである。

岡本氏の全体を概観した指摘は、ある意味的確ではあるかもしれない。実際に「巢雲吟社」が発表した詩題を確認してみると、「端午」「七夕」「中秋月」「重陽」などの節句に関するものや、「閨怨」「採蓮曲」「少年行」など伝統的な詩題、送別詩や贈答詩など友情をテーマにした作品などが大半を占めており<sup>8</sup>、岡本氏が「古い教養」と記しているのも無理はない。しかし、「古い教養を身に付けた知識人の回顧的な情趣」という部分から、旧世代から近代への移行に伴う社会的教育的変化という大きな溝を抱えつつも、琉球王国時代の所謂「琉球漢詩」と繋がっていることを確認できるのかもしれない。

「近代沖縄漢詩」についての本格的な研究としては、先に述べたプロジェクトの漢詩分野のリーダーであった下地智子氏の研究が、ほとんど唯一のものであると言っても良い。下地氏の「近代沖縄漢詩」研究は、上記の科学研究費プロジェクトの報告書や琉球大学人文社会学研究科比較地域文化専攻平成 21 年度の博士論文などにまとめられている。これらの下地氏の研究では、科研費のプロジェクトによって作成された新聞資料データベースを基に、明治・大正期の沖縄における漢詩壇の動向について、概観的な考察がなされている。

下地氏は、明治・大正期に沖縄で発刊された新聞の整理を行なったうえで<sup>9</sup>、『琉球新報』『沖縄毎日新聞』の 2 紙を中心に漢詩作品のデータベース化を行なっている。

沖縄において初めて新聞の創刊がなされたのは 1893 年（明治 26）年のことであるという。しかし、現存している紙面はわずかしかなかく初期の頃の発刊状況は未だ不明な点が多い。下地氏が『琉球新報』『沖縄毎日新聞』に焦点を絞って資料収集したのは、ある程度まとまった形で紙面が残っていること、他の新聞に掲載されている作品も重複してほぼ両紙に掲載されている

<sup>8</sup> 上掲注 1、64～80 頁。

<sup>9</sup> 明治・大正期に沖縄で刊行された新聞資料に関しては、以下の論稿を参照されたい。下地智子「明治・大正期に沖縄本島内で発刊された新聞の保存状況」（『平成 7・8 年度文部科学研究費補助金研究成果報告書「近代沖縄の文学資料の収集・研究とデータベース化」』琉球大学法文学部、1997 年 3 月）、当山昌直・下地智子「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」（『史料編集室紀要』第 28 号、沖縄県教育委員会、2003 年 3 月）、当山昌直「東大明治新聞雑誌文庫に新たに収蔵された戦前の沖縄の新聞」（『史料編集室紀要』第 24 号、沖縄県教育委員会、1999 年 3 月）、当山昌直「収蔵資料散歩 植物標本がもたらした遺産」（『京都大学総合博物館ニュースレター』№15、京都大学総合博物館、2003 年 6 月）、当山昌直「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅡ」（『史料編集室紀要』第 29 号、沖縄県教育委員会、2004 年 3 月）、当山昌直「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅢ」（『史料編集室紀要』第 30 号、沖縄県教育委員会、2005 年 3 月）。

ことが理由である。『琉球新報』は1893年（明治26）9月15日から刊行されており、1940年（昭和15）に廃刊となるまで、明治・大正・昭和の時代を通して発刊されつづけた新聞である。現存する紙面はいくつかの欠号があるものの1898年（明治31）から1918年（大正7）までがまとまって残っている。『沖縄毎日新聞』は1908年（明治41）に創刊され、1915年（大正4）に『沖縄毎日新報』へと新聞名を変え、続いて1920年（大正9）に『沖縄日日新聞』と紙名を変更している。本紙については、1909年（明治42）から1914年（大正3）までのほとんどの紙面が残されている<sup>10</sup>。下地氏の研究によると、両紙に掲載された漢詩作品で収集できた作品数は、『琉球新報』で4926首、『沖縄毎日新聞』1282首という。しかし、重複掲載している作品が604首あり、これを考慮して作品数を導き出すと両紙に掲載されたのは総計5562首となっている<sup>11</sup>。

沖縄の明治・大正期に5000首あまりもの漢詩作品が新聞というメディアにおいて発表されていたという事実は、非常に興味深い。「近代沖縄漢詩」の作者の中心が琉球王国時代の知識人だということを考慮すれば、琉球王国時代に培われた漢詩文化が、近代化という波を経ながらも連綿と継続していたということにもなる。また、同じく近代化後も継続してあった日本漢詩壇との関係性も見逃せない。明治中期に隆盛を見せた日本漢詩壇は、江戸幕府時代の旧い教育を受けた詩人達を中心となっているものの、若年層で新しい西洋の文学を学びながらも漢詩に魅了され詩作を行なった人もいた<sup>12</sup>。それを踏まえると、明治期以降に日本漢詩壇の影響を大きく受けて、琉球王国時代の「琉球漢詩」の伝統を受け継ぎつつも、新しい「近代沖縄漢詩」像が描ける可能性もある。ただそれには、一つ一つの作品の分析が必須であろう。しかし残念ながら、現在のところ各作品を分析した研究はなく、また、下地氏を中心として作成されたデータベース資料も大半が失われてしまっており、下地氏の研究から概観的な作品数や当時の状況を垣間見ることができるのみである。

## 2. 「琉球漢詩」から「近代沖縄漢詩」へー移行期の動向ー

「琉球処分」以降の沖縄は様々な面で混乱をきたしていたが、そのために日本からの多くの官吏が沖縄を訪れるという状況が生まれた。県令も旧大名クラスの人物（鍋島直彬・上杉茂憲など）が派遣され、彼等に伴われて沖縄にやって来た人々も多くいた。主に、沖縄県庁の職員、

<sup>10</sup> 前掲注1、16～17頁。

<sup>11</sup> 前掲注1、18～19頁。

<sup>12</sup> 神田喜一郎『明治文学全集 62 明治漢詩文集』筑摩書房、1983年8月。

学校教員、警察官、医師など知識階級の来沖があった。また、沖縄の状況の調査をすべく訪れた伊地知貞馨や軍隊から派遣された軍医の渡邊重綱・松川修などもいた。

当時、沖縄に足を踏み入れた人々は多数の漢詩作品を残している。例えば、沖縄の調査に訪れた伊地知貞馨はその著書『沖縄志』中に附録として「那覇雑咏」という、沖縄の風物を題材とした15首の七言律詩の作品を収めている<sup>13</sup>。また、調査などの短期間滞在ではなく、官吏として来沖した沖縄県庁の職員や教師などは、沖縄の漢詩人との交流をしつつ詩会を催していたようである。それは、おそらく鍋島直彬の沖縄県令就任の流れを受けて沖縄県庁職員として赴任した谷口復四郎を通じて来沖した谷口藍田の記録から垣間見える。谷口藍田は復四郎の父親で、復四郎の子供・縄太郎の夭折の報を受けて沖縄に足を運び、1882年（明治15）の9月9日から10月13日まで滞在している。藍田は沖縄滞在中の記録を『凶南録』として残しているが、その中には沖縄人と交流していたこと、詩会が催されそれに沖縄の漢詩人も参加していたことが以下のように記されている<sup>14</sup>。

（九月）十四日、在緑陰深處。午後同田中・池尻二子赴首里城。城距那覇一里、三十六町高在萬松中。投豐見城按司家（舊王族也）即秋永梅軒・池野歸一・長谷川毅之介三輩所寓、相見俱喜。少焉瀧脇信敏・山田正（醫員）・北御門卓爾來見。與信敏圍棋、信敏嘗爲木更津城主、今奉職首里、快豁好詩。已而堀江信成・添田弼、土人豐見城盛綱並至。盛綱解邦語、爲人洒落可愛。嘗稱親方、後爲顧問。衆皆歡醉、至夜而散、余留宿按司氏。此日相會者十有三人也。嚮乘籃輿、輿以竹制之、輕巧頗便、轎夫徒跣履石路、流汗雨滴、可愍矣。

（十四日、緑陰深處に在り。午後田中・池尻二子と共に首里城に赴く。城は那覇を距つこと一里、三十六町高く萬松中に在り。豐見城按司家（舊王族なり）に投じ即ち秋永梅軒・池野歸一・長谷川毅之介の三輩の寓する所にして、相い見え俱に喜ぶ。少しくして瀧脇信敏・山田正（醫員）・北御門卓爾來たり見ゆ。信敏と與に棋を圍む、信敏は嘗て木更津城主爲りて、今首里に奉職し、快豁にして詩を好む。已にして堀江信成・添田弼、土人豐見城盛綱並びに至る。盛綱は邦語を解し、人と爲りは洒落にして愛すべし。嘗て親方と稱され、後に顧問と爲る。衆皆歡び酔い、夜に至りて散ず、余按司氏に留宿す。此の日相い會する者十有三人なり。嚮に籃輿に乗り、輿は竹を以て之を制り、輕巧にして頗る便、轎夫徒跣にて石路を履み、汗を流すこと雨滴にして、愍むべきなり。）

本文から、藍田は豐見城按司宅に投宿しており、そこは役人として沖縄にやって来た秋永梅

<sup>13</sup> 伊地知貞馨『沖縄志』1877年3月。

<sup>14</sup> 谷口鐵太郎編輯『藍田谷口先生全集』全5巻、1912年3月。

軒・池野歸一・長谷川毅之介が寓居していたことが分かる。その後、瀧脇信敏・山田正（醫員）・北御門卓爾、そして堀江信成・添田弼、豊見城盛綱が加わり、宴会を催して夜まで楽しんだ様子が描かれている。この日の記録には漢詩のやり取りをしたことは記されていないが、日本人の官僚と地元の豊見城按司との交流があったこと、谷口藍田という漢学者が来沖しての歓迎の宴会であることから、漢詩のやり取りがあった可能性は低くはないのではないと思われる。

また、以下の記録からは、来沖した日本人同士で詩会を催していたことが分かる<sup>15</sup>。

（九月）二十三日、朝起、携池野生浴鹽湯、遂訪馨治、話首里城遊。已而復也來迎、相携赴長尾顯信氏詩會、相集者瀧脇秋永・添田・池尻・長谷川諸子也。詩成酌酒而去。（二十三日、朝起き、池野生を携え鹽湯に浴し、遂に馨治を訪れ、首里城の遊びを話す。已にして復もまた來たり迎え、相い携えて長尾顯信氏の詩會に赴き、相い集いし者は瀧脇秋永・添田・池尻・長谷川諸子なり。詩成りて酒を酌みて去る。）

（十月）五日、申牌、同兒復赴法水詩筵、相會者瀧脇秋永・池尻・立花・長谷川・長尾・山口等十餘人也。聞昨年十月孫繩之歿於那覇也、法水善幹葬事。（五日、申牌、兒の復と共に法水の詩筵に赴き、相い會する者は瀧脇秋永・池尻・立花・長谷川・長尾・山口等十餘人なり。聞くに昨年十月孫の繩の那覇に歿するや、法水善く葬事を幹すと。）

この記述にある詩会には日本人官僚の名前のみが記されており、沖縄の人が参加していたことは確認できない。しかし、このように詩会が催されていたことを考慮すると、日本人・沖縄人の両者がともに参加していた詩会が催されている可能性は低くはないものと思われる。上掲した『凶南録』に登場する豊見城盛綱・添田弼・堀江信成・谷口復四郎は、職員として沖縄県庁に勤める同僚であり<sup>16</sup>、池野歸一・北御門卓爾も同様に沖縄県庁の職員であったようである<sup>17</sup>。また、長谷川毅之介は沖縄師範学校の教諭であり<sup>18</sup>、山田正は『凶南録』に「醫員」と記されている。谷口藍田が交流した人々は、子供の復四郎の関係からであろうが、ほぼ官吏である。当時の沖縄では日本への同化政策が進行中であり、日本からの知識人の流入も多かった。そして、来沖した知識人たちは詩会などを通して交流を深め、郷愁を慰めていたのかもしれない。ロバート・キャンベル氏は、当時に沖縄を訪れた官吏について以下のように述べている<sup>19</sup>。

<sup>15</sup> 前掲注 14。

<sup>16</sup> 『明治官員録』博公書院、明治 15 年 11 月。

<sup>17</sup> 『沖縄県職員録 明治 17 年 1 月改』沖縄県編。

<sup>18</sup> 前掲注 17。

<sup>19</sup> ロバート・キャンベル「琉球処分詩史—南へ征く官吏たちの風雅—」『國語と國文學』第 70 卷第 5 号、東京大学国語

北部九州の詩家によって明治十年代に編まれた漢詩集を繙いてゆくと、丁度十二年の秋あたりから、現地で物された「琉球雑咏」等の題、あるいは赴任の餞として内地で詠まれた送迎の応酬詩などを相当量数え上げることができる。鍋島県令も自ら臨み、奨励を惜しまなかったらしい。「同声社」という名の詩社が結ばれ、那覇の官吏達に遊芸の機を与えたことも知られるのである。定例の会は、首里城下で十二年に発足され、少なくとも藍田が訪れる十五年の秋（次代上杉茂憲県令在職）までに活動を続けた。集うた文人は、始めは県令と原書記官の他に秋永照隣（別号梅軒）や谷口復四郎といった鹿島旧家臣に、上総桜井旧藩主で直彬公に仕えた内務省四等属滝脇信敏（号顧峰、従五位）が中核を為したらしい。

キャンベル氏は、沖縄初代県令となった鍋島直彬とともに来沖した官吏や旧家臣の詩集を検討し、当時、沖縄にやって来た日本知識人の詩会を核にした交流について述べている。それは、次代の上杉茂憲県令の時代にも引き継がれていたようで、藍田が来沖した時期まで詩会による日本人同士の交流があったことは上述した通りである。ただ、疑問が残るのは、その詩会に沖縄の人物も参加していたのかどうかである。もちろん、日本人のみの詩会もあったであろう。しかし、現地・沖縄の知識人との交流がなかったとは考えにくい。実際に後の沖縄学の研究者である真境名安興は、以下のようなエッセイを残している<sup>20</sup>。

#### 【田原法水老衲の話】

今日の県立図書館の敷地は明治十七年頃西村県令の別邸として建てし所にて詩会等ありしと。列席者には久志助忠、喜舎場朝賢等もありしと。明治十五年に谷口藍田琉球を訪問し岩村県令と同宿せりと。

ここでタイトルに挙げられている田原法水は、先に示したように、藍田の『図南録』にも登場した人物である。当時の詩会についての聞き取りと思われるが、列席者に久志助忠や喜舎場朝賢などの沖縄の人の名が連なっていることは興味深い。特に喜舎場朝賢は、琉球王国最後の国王・尚泰の側仕え兼教師でもあり、末期琉球王国時代における随一の知識人であった。これらのことを併せて考えると、やはり、沖縄の人々が参加している詩会もあり、これによって漢

---

国文学会、1993年5月、11～22頁。

<sup>20</sup> 『真境名安興全集』第3巻、琉球新報社、1993年2月、169頁。『琉球新報』昭和10年に連載された「笑古漫筆」の一篇。

詩文化は断絶することはなく沖縄の地において引き継がれており、日本人と沖縄人の交流の場となっていたであろうことが推測できる。

また、この時期に沖縄を訪れた日本人が沖縄を題材にどのような漢詩作品を残したのかについても注目すべきであろう。谷口復四郎は、1879年（明治12）から1883年（明治16）まで官吏として沖縄に滞在し、沖縄本島各地や離島などへの巡視を行っており、その際に多くの漢詩作品を作っている。それは「球遊詩史」前後編としてまとめられ『谷口藍田全集』に収められており、当時の沖縄各地の状況が作品からは読み取れる。また、その中には沖縄人との贈答や詩会に関わる作品も残している。「球遊詩史」については、ロバート・キャンベル氏の調査によると、自筆の原本があるようである<sup>21</sup>。

祐徳文庫蔵に係る「球遊詩史」初・二編の自筆原稿は、それぞれ半紙墨付四丁と五丁の紙捻綴りにした薄冊に、十五首宛を認めた体のものである。初編は九月下旬（明治12年）までに脱稿した詩稿を鹿島氏族、当時来琉中の文人画家家島鉄叟に託して、長崎の藍田（谷口藍田。谷口復四郎の父。）の許へ届けたのを、藍田が朱批を入れ、十月二十五日付で那覇へ送り返したもの。二編も同じく、十二年十月～十一月中に得た新詩小群に父が丁寧な添削を加え翌年の一月に息子へ返送した詠草から成る。

筆者は自筆原稿そのものを確認してはいないが、キャンベル氏の調査を基にすると、藍田の添削を受けた復四郎の作品が「球遊詩史」として『谷口藍田全集』に収録されたものと思われる。「球遊詩史」には、復四郎が沖縄の官吏となって長崎から沖縄へ向かって旅立つ際の作品から始まり、その後鹿児島、奄美大島を経て那覇港に入り、沖縄赴任滞在中に久米島や宮古、八重山を巡回した際の作品や、沖縄の風物を題材に作成した漢詩が収められている。中には「親泊朝啓來訪。席間次其韻賦示。」「同声社第二会即事」「九月十二日。同声社赴瀧脇君招筵。席間賦呈。二首」など、沖縄人との交流や当時開催されていた詩会の様相を窺えるものもある。特に興味深いのは「巡島百首」と題して久米島・宮古・八重山を巡回した時のまとめた作品があることである。なぜなら、先島諸島を題材にして作られた作品は、「琉球漢詩」にもそれほど多くないからである。やはり、当時の先島の産物や風俗習慣などを題材に詠んだ作品群はある種の異国情緒を含んでおり、当時の日本人が目にした沖縄の物産や異文化を詠み込んでいる。以下に2首ほど作品を紹介したい<sup>22</sup>。

---

<sup>21</sup> 前掲注19。

<sup>22</sup> 前掲注14、63～65頁。

八重山島五十六首 其五

榕影婆娑牆上斜 榕影 婆娑として 牆上に斜めたり  
森林到處認人家 森林 到る處 人家を認む  
不尋可識長春國 尋ねずして識るべし 長春の國  
少女腕頭黥百花 少女の腕頭 百花を黥す

この作品は、ガジュマル（榕樹）の生い茂る南国の風景、そして緑濃い山中に点在する人家の様子から南国としてのイメージの沖縄を描き、最後にハジチという沖縄の風習を詠み込んでいる。ハジチとは、初潮が始まった頃から女性の手の甲に入れ墨を施す風習である。結婚までに完成させるというものと、結婚後に嫁ぎ先の家の紋を追加して完成するものがあるらしい。当時の沖縄女性の一つの通過儀礼と言える。しかし、1899年（明治32）に禁止令が出され、日本化が進むとともに次第に途絶えていった。谷口復四郎の赴任時期の沖縄においては、ハジチがまだ行われており、「百花」と表現されるように美しく「少女」の手を彩っていたのが読みとれる。

八重山五十六首 其十三

織絲飛白織文妍 織絲白を飛ばし 文妍を織る  
色澤如油映日鮮 色澤は油の如く 日に映えて鮮やかなり  
爲須數婦一年力 爲に數婦の一年の力を須うるも  
京價傳來三十圓 京價 傳え來たる 三十圓なり

この作品は八重山の特産品の八重山上布を題材に詠まれたものである。八重山上布は、苧麻から糸を紡ぎ織りだした布で、琉球王朝時代には王府御用達として貢納されていた上布である。王朝時代には、八重山群島の女性は織布に従事し、王府の官吏の監視化の下で紋様の設計図に沿いながら機織りすることを義務付けられていた。復四郎は、「油の如く」白く艶やかな布が、太陽の光を受けて「鮮やか」であると八重山上布の美しさを描き出したうえで、それを支えるものは「數婦の一年の力」を尽くすほどの重労働であるのだと詠んでいる。当時の八重山の機織りの状況を復四郎なりに受け止めていたものと思われる。

以上の事を鑑みると、琉球王国時代から沖縄県政へと移り変わっていったこの時期に詩会や日本から来沖した官吏の存在は非常に大きいものと言えよう。交流の場としての役割を十二分に果たしていたであろうことは容易に想像できる。この交流の場は、その後、漢詩結社や雑

誌・新聞への投稿という形で詩作の場を移していったようである<sup>23</sup>。

当時の日本近代の漢詩壇の状況については、印刷技術の発展とともに雑誌の刊行がなされ、森槐南や国分青厓などの活躍もあり、新しい詩壇の開拓が行なわれ「明治に至って未曾有の発達を遂げ、明治十年前後から三十年代初期まで其の全盛を極め」<sup>24</sup>たという。それらの雑誌に沖縄から作品を投稿した漢詩人がいた。その代表として、明治 20 年代に日本雑誌への投稿を行っていた源河朝常がいる。源河は主に『鷗夢新誌』への投稿を行っていたようであり、1891 年（明治 24）から 1894 年（明治 27）までに掲載された 8 首の作品が確認できる<sup>25</sup>。源河がどういう人物であったのかについては、よくは分かっていない。源河は、首里の桃原に生まれており、号として放齋と名乗り、1894 年（明治 27）から 1896 年（明治 29）までは山方筆者として大宜味で勤務し、後に国頭郡役所に移り、名護において亡くなったようである<sup>26</sup>。源河の漢詩作品については『放齋詩集』が編まれていたようであるが<sup>27</sup>、戦禍で失われている。現在見ることのできる源河の作品は、『鷗夢新誌』への投稿詩 8 首と、その後詩作の発表を沖縄で発刊された新聞紙上に移した後の投稿詩 91 首のみのようである<sup>28</sup>。

ただ確認しておきたいことは、この時期に新しい空気を取り入れた明治漢詩壇に沖縄からの投稿があったということである。雑誌への投稿には批評がつくものであり、それによって沖縄の漢詩人の表現力や知識が深まると同時に、「新しい」西欧的な文学観念も導入されたものと思われる。この時期以降は沖縄における漢詩作成・投稿の場は沖縄で発刊された新聞へと場所を移していくが、それに近代日本の漢詩壇の影響があったことは間違いないだろう。

### 3. 「近代沖縄漢詩」の隆盛—漢詩結社と沖禎介追悼詩—

沖縄において初めて『琉球新報』と称する新聞が発刊されたのは 1893 年（明治 26）のこと

<sup>23</sup> 前掲注 1、11 頁。

<sup>24</sup> 前掲注 12。

<sup>25</sup> 源河の作品として『鷗夢新誌』に掲載された 8 首の作品は以下の通りである。「雨後得月」（第 60 集、明治 24 年 7 月）、「榴花」（第 61 集、明治 24 年 8 月）、「扇上畫牡丹」（第 68 集、明治 25 年 3 月）、「夏夜聞簫」（第 72 集、明治 25 年）、「中秋不見月節 一」（第 75 集、明治 25 年）、「病中口占」（第 87 集、明治 27 年 2 月）、「春遊」（第 89 集、明治 27 年 4 月）、「晚春雨中」（第 90 集、明治 27 年 5 月）。

<sup>26</sup> 『沖縄県職員録』沖縄県発行、明治 27 年 10 月。また、源河の死去については『琉球新報』明治 38 年 11 月 19 日号に次のような訃報記事が掲載されている。「源河氏の訃 国頭銀行員源河朝常氏は去る十四日長逝したる由。同氏は本県漢学者中□々の間へあり賦詩に巧にして折り折り本紙に寄稿して詞林に光彩を添えしは読者の知る所なるが、今□訃に接す。甚だ惜しむべき事なり。」（□は判読不能文字）。

<sup>27</sup> 『沖縄県立図書館郷土史料目録』（昭和 4 年 3 月）に『放齋詩集』の記録がある。

<sup>28</sup> 前掲注 1、12 頁。

である。現在、初期の頃の資料が失われており、創刊の頃の状況はよく分からない。『琉球新報』は、明治・大正・昭和期を通して続いている新聞である。しかし、第二次大戦の戦禍により失われたものも多く、現存する紙面は1898年（明治31）から1918年（大正7）の間のものである。欠号はあるものの、まとまって見ることのできる近代期の沖縄の代表的新聞である。もう一つまとまった形で現存しているのは、1908年（明治41）に創刊された『沖縄毎日新聞』である。新聞名を変えつつも1921年（大正10）まで刊行されていた。『沖縄毎日新聞』は1909年（明治42）から1914年（大正3）までの期間に発刊された紙面がまとまって残っており、この二紙は当時の沖縄における文壇の状況を窺うのに不可欠な資料である<sup>29</sup>。

下地氏の研究によると、『琉球新報』に掲載された漢詩の総数は4926首、『沖縄毎日新聞』においては1282首である。ただし重複もあり、それを考慮すると『琉球新報』では4890首、『沖縄毎日新聞』では1274首の作品が確認できている<sup>30</sup>。また、この時期に活躍した漢詩人は多く漢詩集を残していたらしいが、そのほとんどが失われており、現存する神山政方の『蘭谷詩稿』を参照すると詩集に収録された作品の半数以上が新聞に掲載された作品のようである<sup>31</sup>。

現存する新聞資料の状況により、「近代沖縄漢詩」については1898年（明治31）からの作品を検討していくことになる。明治・大正期における新聞への作品掲載に関して、大きな存在であったものとして、漢詩結社が挙げられる。1898年12月の新聞にはすでに「龍吟社」という漢詩結社の作品が掲載されている。「龍吟社」は佐藤海玉を中心に結成されたようで、その結成の経緯について新田義尊による以下のような記述がある<sup>32</sup>。

新田聖山云、頃余訪道雄僧都於波上護国寺。玉峰翁中山懷古詩、在同寺万丈之壁間。僧都即讚岐人、造詣密教、兼善詩文、來弘教祖空海之法、頗得教徒之心。而余道無取於釈氏、然時與僧都開詩筵。玉峰・東山・霞峰・垣花・儉齋・岐山等諸先輩、亦見泣其席、迭相徵逐、互相唱和、展縑潤筆。名曰「龍吟社」。而玉峰翁為長、余深推翁、因収諸手記。（新田聖山云う、頃々余道雄僧都を波上護国寺に訪ぬ。玉峰翁の中山懷古詩は、同寺の万丈の壁間に在り。僧都は即ち讚岐の人にして、密教に造詣し、兼ねて詩文を善くし、来たりて教祖空海の法を弘め、頗る教徒の心を得。而るに余釈氏を取ることを無しと道い、然時僧都と詩筵を開く。玉峰・東山・霞峰・垣花・儉齋・岐山等の諸先輩、亦見え其の席に泣み、迭

<sup>29</sup> 前掲注6を参照されたい。

<sup>30</sup> 前掲注1、18～20頁。

<sup>31</sup> 前掲注1、18頁。なお、当時の漢詩人たちの作品集については、『沖縄県立図書館郷土資料目録』（昭和4年版）によると、喜舎場朝賢の『東汀詩集』、源河朝常の『向汝霖詩集』、普天間助宜の『顧余嬉詩稿』、久志助法の『晨光閣唱和集』、久志助忠の『子贊詩集』が県立図書館に収められていたことが確認できるが、第二次大戦の戦禍により失われ、現在では見つかっていない。

<sup>32</sup> 『琉球教育』第51号、「文林」欄、明治33年3月号。

いに相い徴逐し、互いに相い唱和し、縑を展げ筆を潤す。名づけて曰く「龍吟社」と。而して玉峰翁長と為り、余は深く翁を推し、因りて諸手記に収む。）

この新田の手記によると、波上の護国寺にて詩会が恐らくは定期的に催され、それが漢詩結社へと発展し、新聞紙上への掲載と繋がっていったものと思われる。「玉峰翁為長」とあるように、中心人物は佐藤海玉であり、佐藤を中心に様々な人物が集まっていたようである。しかし、号による記述のため、参加者の氏名など不明な点も多く、そこに沖縄の文人が参加していたのかについてはよく分からない。佐藤海玉は、1905年（明治38）まで那覇区裁判所判事を務めた人物であり、その後に弁護士となり、1910年（明治43）に東京へ戻ったようである。また、この手記を残した新田義尊は、1893年（明治26）から1902年（明治35）まで沖縄県師範学校の教諭として勤務していた<sup>33</sup>。そのことを考慮すると、参加した人物のほとんどは廃藩に当たって日本から派遣された官吏や教員達であったと思われる。現存する新聞紙面のうち、初期に掲載された漢詩結社である「龍吟社」が佐藤・新田などの日本人が中心となっていることを鑑みると、近代沖縄における漢詩結社の出発点として、来沖した日本人によって結成された漢詩結社の存在が大きかったと考えられる。

その後、沖縄における漢詩結社が活躍するのは、明治40年代になってからである。実際、明治30年代の新聞紙面に掲載されている漢詩作品は少なく、そのほとんどが日本人の主宰する漢詩結社や新聞社の企画するイベントによる募集作品である<sup>34</sup>。明治40年代になって、ようやく沖縄の詩人たちが自身達で漢詩結社を作り、自作の漢詩作品を新聞へ投稿するようになった。その契機となったのは、「沖禎介追悼詩」の特集である。

沖禎介は長崎生まれで、日露戦争当時ロシア軍の鉄橋を爆破する計画を実行しようとして逮捕され、ハルピンで銃殺された。当時の日本においても愛国の士と讃えられ、新聞でも大きく採り上げられたようである<sup>35</sup>。沖縄の『琉球新報』も「沖禎介追悼詩」の特集を企画し、「沖氏生前の知友發企となり同氏の行蹟を後世に傳へん為め印刷の目的にて博く詩文を募りつゝあり。」<sup>36</sup>と日本各地からの作品募集を行なっている。

このような企画を沖縄の新聞社が行なえるようになった背景としては、同化政策による日本化が進んだこの時期だからこそ可能であったのであろう。1879年（明治12）の「琉球処分」前後から、沖縄においては親日本派の「開化党」と、清国との繋がりを頼って琉球王国を再建

<sup>33</sup> 尚球『廃藩当時の人物』尚球発行、1915年4月。

<sup>34</sup> 例えば1898年（明治31）11月には「奉祝天長節」という作品が掲載されており、天皇の誕生日の祝賀として作品が集められていたことが見て取れる。

<sup>35</sup> 丸山長渡『烈士沖禎介：満蒙の人柱六烈士小傳』日本米糠食普及會、1933年9月。

<sup>36</sup> 『琉球新報』明治37年6月25日号。

するために動いていた「頑固党」との二大派閥が相い争っていた。「頑固党」に属する人々は、「脱清人」<sup>37</sup>として日本官憲の監視を逃れて清へ赴き陳情を行っていた。後に、アメリカ大統領グラントの調停により日本と清国の間で「琉球分島案」<sup>38</sup>が調印されようとした時、「脱清人」の一人である林世功は、「琉球分島案」への抗議を続け、北京において「辞世」<sup>39</sup>の作品を残して自害した。当時、日本と交渉中であった清国代表の李鴻章はその報を聞き、調印を思いとどまったという<sup>40</sup>。しかし、その後の日清戦争における清国の敗北により琉球王国再興の夢は断たれてしまい、日露戦争の時期には同化政策が浸透し「日本」への愛国へと沖縄の人々は進んでいった。

もう一つ、沖縄の地において「沖禎介追悼詩」の特集が催された背景がある。それは、当時沖禎介の父親である沖莊蔵が那覇地方裁判所判事として沖縄に赴任していたことであろう。大々的に公募を行なったのは、単純に父・莊蔵への衷心とは考えられない。前述したように「国民的同化を計る」<sup>41</sup>一つの材料としたものであったと考えられる。しかし、この募集によって日本全国から824首の作品が集まっている<sup>42</sup>。漢詩作品と銘打っているとはいえ、中には平仄の規則どころか押韻すら踏んでいない、漢詩とも呼べない漢字の羅列でしかないものもある。その大半は日本の新聞からの転載が中心であるが、その後半には沖縄の詩人の作品が僅かながら見受けられる。注目すべきは、この一大募集によって新聞紙上に多くの漢詩作品が掲載されたことは否めなく、それは、その後も新聞社が漢詩掲載に多くの紙面を割く方向性を許容したという状況である。この後、「沖禎介追悼詩」特集が終了し沖縄の文人による漢詩結社からの投稿が行なわれることになる。また、『琉球新報』新聞社も創刊15年を祝う文芸作品を募集しており、そのなかに琉歌・短歌・俳句に混じって漢詩作品も掲載されている。つまり、「沖禎介追悼詩」特集を機に漢詩掲載欄が増え、それを目にした沖縄の文人たちが自らの漢詩作品を発表できる場を認識したということになる。それまで、恐らくは「家の学問」として内々で継続

<sup>37</sup> 「琉球処分」が決行される前後に、琉球王国の存亡を清国に知らせ、王国存続への助けを清国に求めて福建省へ渡った人々を「脱清人」という。代表的な人物として、王家の親族である向徳宏（幸地朝常）等がいる。

<sup>38</sup> ある意味の「琉球処分」最終段階で、日本と清国間の琉球問題をアメリカ大統領グラントの調停によって持ち出された案である。協議は様々に乱れたようであるが、最終的に宮古・八重山群島を清国領土に、沖縄本島・奄美群島を日本領土にするという形で落ち着いた。しかし、清国代表の李鴻章は土壇場で調印を拒否し、幻の条約となった。

<sup>39</sup> 「脱清人」として琉球王国存続に動いていた林世功は「琉球処分」により琉球王朝が滅んだ報を受け北京へ直接陳情を願って向かった。およそ1年ほど北京で陳情書を出し続けていたようであるが、聞き入れられぬことを受けて「辞世」詩を残して自刃した。「辞世」詩は2首残っている。それは「古來忠孝幾人全、憂國恩家已五年。一死猶期存社稷、高堂專頼弟兄賢。」「廿年定省半違親、自認乾坤一罪人。老淚児憶雙白髮、又聞驅耗更傷神。」という作品である。（蔡大鼎『北上雜記』所収）。

<sup>40</sup> 西里喜行「琉球救国運動と日本・清国」『法政大学沖縄文化研究所紀要 沖縄文化研究』第13号、1987年2月、25～106頁。

<sup>41</sup> 大田昌秀『沖縄の民衆意識』弘文堂新社、1967年8月。

<sup>42</sup> 前掲注1、40頁。

されていた詩作の成果が表に出ることになったのである<sup>43</sup>。

明治 40 年代、沖縄において次々と漢詩結社が結成された。下地氏の研究によると、明治・大正期に結成された漢詩結社として新聞紙上の掲載作品で確認されるのは、「龍吟社」「小雅堂集」「文墨会」「巢雲吟社」「玉峰吟社」「吟風社」「興於吟社」「癸丑吟社」「烝髻社」の 9 結社である<sup>44</sup>。先述したように、初期の頃は来沖日本人が中心となって結社を作っており、その中で最も長く続いたのは「文墨会」のようである。主催者である佐藤海玉の日本への帰還などもあり中断時期もあったようであるが、『沖縄毎日新聞』に「文墨会の久しく中絶せりしを再興」<sup>45</sup>するとの記事があり、新聞に掲載された作品を概観するに日本人のみならず沖縄の人々も会に参加していたことが分かる<sup>46</sup>。後に沖縄人を中心とした結社も現われた。その中核的な存在であったのが「巢雲吟社」であろう。「巢雲吟社」は、最後の国王・尚泰の側仕えで「琉球処分」以後は地方にて農耕を生業として生き、「琉球処分」時代の記録を残した喜舎場朝賢を中心に旧首里士族によって結成されていたことが以下のように記されている<sup>47</sup>。

翁七十の頃首里士族十余輩会をなして詩を学ぶ。翁その聘請に応じて教師となり、毎月詩題を出してその添削を為すに評点を定めて大に奨励されたことが数年に及んだ。

明確に「巢雲吟社」という名称は出ていないが、喜舎場の評点の付いた作品の紙面への掲載状況を併せ見るに、「毎月詩題」を通して漢詩を作成し添削をするという会が設けられており、それらの作品が「巢雲吟社」の名で紙面に出ていることから、この会が「巢雲吟社」の活動であったことは間違いのないであろう。下地氏の研究によると、「巢雲吟社」の名で新聞に掲載された作品は 423 首にもおよび、他の結社に抜きん出て最も多くの漢詩作品が掲載されているようである<sup>48</sup>。「巢雲吟社」の中心であり評者でもあった喜舎場朝賢は、琉球王国最後の官生だった東国興（津波古政正）に師事し、琉球王国時代の漢詩文文化の伝統を引き継いでいた人物である。喜舎場の作品および彼が付した批評などを総括的に分析すると、当時の日本漢詩壇の多大な影響がありつつも、「琉球漢詩」から「沖縄近代漢詩」へと繋がる地下水脈が見えてくるのか

<sup>43</sup> 比嘉春潮のエッセイ集『蠹魚庵漫章』（勁草書房、1971 年 9 月）によると、明治期の沖縄においては漢詩文や儒学などについては「家の学問」として、学校などにおいては英語や算数などの西洋式学問を身に付けることを奨励していた状況が見受けられる。

<sup>44</sup> 前掲注 1、42～113 頁。新聞掲載の際に異なる名称での結社もあったようであるが、掲載作品の作者や批評者について調査したうえで、下地氏は大きく 9 結社と（琉歌・短歌などとの合同結社を含めると 10 結社）まとめている。詳しくは下地氏の論文を参照されたい。

<sup>45</sup> 『沖縄毎日新聞』大正 2 年 8 月 2 日号。

<sup>46</sup> 前掲注 1、52～57 頁。

<sup>47</sup> 親泊朝擢「喜舎場朝賢翁小伝」、喜舎場朝賢『琉球見聞録』所収、至言社、1977 年 12 月。

<sup>48</sup> 前掲注 1、64～80 頁。

もしれない。

もう一つ注目すべき結社として「烝髻社」が挙げられる。「烝髻社」は福建省出身の高相杰を中心に結成された結社である。参加者の顔ぶれからして、久米村出身者を中心に作られた結社であると思われる<sup>49</sup>。実際に「烝髻社」と銘打った「惜別」という小冊子なども発見されており、以前に沖縄県立博物館にて展示され新聞掲載の作品との整合も確認できている<sup>50</sup>。久米村は、琉球王朝時代に王国の外交や漢詩文作成や中国語の教育を一手に担っていた職能集団であり、もちろん「琉球漢詩」隆盛時代の中心的役割を果たした村である。その後裔達で作った漢詩結社の作品群も、「琉球漢詩」と「近代沖縄漢詩」の繋がりを窺うものとして、見逃せない存在であろう。新聞に掲載された作品数は全 101 首ほどで<sup>51</sup>、首里系旧士族を中心とした「巢雲吟社」には及ばぬものの、やはり「近代沖縄漢詩」の実情を探るポイントの一つと言えよう。

漢詩結社の活躍の他に気になるのは、「琉球処分」以前の琉球文人やかつて琉球を訪れた冊封使の作品の紹介である。沖縄学の研究者であった真境名安興は、1909 年（明治 42）の『沖縄毎日新聞』紙上で「詩化されたる那覇」と題する全 18 回の連載文の中で、多くの琉球文人や冊封使、従客の漢詩作品を紹介している<sup>52</sup>。また、1911 年（明治 44）には琉球における大文人及び教育者として名高い程順則の作品や、程順則が中国から齎した『六論衍義』の紹介もなされている。ほかには、1913 年（大正 2）に「琉球処分」の際に北京にて自刃した林世功の三十三年忌の追悼企画が『沖縄毎日新聞』で組まれている。この時期にかつての琉球王国時代の漢詩文を紹介する企画がなされたのは、1909 年 4 月 18 日に大々的に開催された琉歌大会の影響もあろう。日本同化へと邁進していた沖縄において、琉球文化の復興を考えていた当時の沖縄における知識人の想いは、以下の伊波月城の文章から窺うことができる<sup>53</sup>。

琉球固有のものはすっかりぶちころさなくてはならないといふ浅薄なる国家主義の爲めに一時大打撃を蒙ってゐた琉球文芸は今春になって復活して、来る十八日には三十六島の詩人等が奥山公園に集つて連合琉歌大会なるものを開催することになつてゐる。之れ実に琉球民族が各自の立脚地を知つて精神的に復活した証拠で明治四十二年は沖縄に於ける文芸復興の第一年と見て差支へないと思ふ。されば犬の子ねあがりや北山の女詩人なべ及

<sup>49</sup> 「烝髻社」の参加者として大田徳明や新里國華、名護明之、楚南能任、名嘉山大昌など久米村出身だと確認できる人物が多い。全ての参加者が久米村出身であったか否かはまだ判明していないが、久米村出身の人々を中心となっていたであろうことは窺える（前掲注 1、106～111 頁）。

<sup>50</sup> 『沖縄タイムス』（2015 年 1 月 22 日号）に東京在住の富永進一氏から小冊子の寄贈があった記事が掲載されており、筆者は展示会を開催するにあたって、小冊子中の漢詩作品について新聞掲載紙との確認を行なった。

<sup>51</sup> 前掲注 1、106～111 頁。

<sup>52</sup> 真境名安興「詩化されたる那覇」『真境名安興全集』第 4 巻、琉球新報社、2 月、132～145 頁。

<sup>53</sup> 伊波月城「嶽色潮声」『沖縄毎日新聞』明治 42 年 4 月 16 日号。

び其他古代の詩人とも、の霊もあまみやからあもりして大に応援することであらう。

月城は、1909年（明治42）を「文芸復興」の年と述べ、琉球文化及び文芸の復興を訴えている。実際に、この時期に琉歌・短歌・俳句・漢詩など様々な文芸が新聞紙面に掲載されている<sup>54</sup>。その流れの中で「近代沖縄漢詩」は隆盛した。月城はその状況を「我が国の思想界にてよろこぶべき現象は漢学研究熱の勃興した事」<sup>55</sup>と評価している。そして、それを担う中心として琉球王朝時代に詩作を学んでいた喜舎場の存在は大きい。また、それは「家の学問」としての漢詩文文化が維持されていたことを意味しよう。それに加えて、「烝髦社」という漢詩結社に集った久米村系の知識人の存在も見逃せない。それらが「琉球漢詩」と「近代沖縄漢詩」を繋ぐ懸け橋となっていることは疑いようがないであろう。

#### おわりに—今後の研究課題—

本稿は、下地氏の研究成果を基盤に近代沖縄における漢詩文文化の概要について述べてきた。前述したように、「近代沖縄漢詩」研究はほぼ手つかずと言っても過言ではない。下地氏によって一旦は研究の扉が開いたものの、新聞収集データは一部しか残っていない。現在のところ、下地氏と共同研究作業をしていた上里賢一氏と筆者の手元に痕跡が残されているのみである。したがって、まず優先されることは下地氏の研究に残された手がかりを基に新聞資料のデータを復元することである。その次に、「琉球処分」期に来琉した日本人によって残された資料の収集・分析も重要である。沖縄において廃藩置県を断行した明治政府は、それでも琉球に気を使ったのか、県令として初期に派遣されたのは旧大名の鍋島直彬や上杉茂憲などであった。彼らは旧家臣を伴って来沖し当時の沖縄についての調査を行ない、琉球の旧士族との交流を通して多くの資料を残している<sup>56</sup>。近代沖縄に関する研究には欠かせない資料である。また、明治・大正期の日本漢詩壇の動向も窺う必要がある。そして、大正期に沖縄を訪れた日本の学者についても考えるべきであろう。民芸運動を興した柳宗悦や民俗学者の柳田國男、国文学者の折口信夫、石垣島で気象観測師を務めつつ石垣の民俗や文化に関する研究を行っていた岩崎卓爾、台湾帝国大学中国文学科の教授として派遣された久保天隨などは、沖縄学を興した伊波普

<sup>54</sup> 前掲注3を参照されたい。

<sup>55</sup> 『沖縄毎日新聞』明治43年1月1日号。

<sup>56</sup> 例えば、初代県令の鍋島直彬とともに書記官として沖縄を訪れた原忠順の著書として『有悔堂遺稿』があり、若干数ではあるが沖縄と関わる作品を残している。

猷や真境名安興などと交流し、その中で漢詩作品を残している<sup>57</sup>。以上述べてきたように、なにもかも課題が山積の近代沖縄漢詩研究であるが、まずは新たな一步を踏み出すための布石としてこの論考をしたためた。

#### 【参考資料文献一覧】

『沖縄毎日新聞』

『琉球新報』

新川明『明治処分以後』上・下巻、朝日新聞社、1981年。

新崎盛珍『思出の沖縄』新崎先生著書出版記念会、1956年2月。

池宮正治・小渡清孝・田名真之編著『久米村一歴史と人物一』ひるぎ社、1993年3月。

入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』研文出版、1989年2月。

上里賢一「林世功三三年忌追悼詩文の周辺—その背景と作品紹介—」東江平之編『大田昌秀教授退官記念論文集 沖縄を考える』大田昌秀先生退官記念事業会、1990年10月。

大田昌秀「明治時代の沖縄の新聞（上）（中）（下）」『新聞研究』第154・156・157号、日本新聞協会、1964年5月～7月。

太田良博『沖縄にきた明治の人物群像』月刊沖縄社、1980年2月。

岡本恵徳『沖縄文学の地平』三一書房、1981年10月。

沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年5月。

我部政男『明治国家と沖縄』三一書房、1979年10月。

神谷政方『蘭谷遺稿』神谷政良発行、1931年12月。

喜舎場朝賢『琉球見聞録』至言社、1977年12月。

久保田淳ほか『岩波講座 日本文学史』第15巻「琉球文学、沖縄の文学」岩波書店、1996年5月。

久保天随『琉球游草』久保得二発行、1933年9月。

蔡大鼎『北上雑記』（私家版）。

仲程昌徳『伊波月城—琉球の文芸復興を夢みた熱情家—』リプロポート、1988年5月。

仲程昌徳『沖縄の文学 1927年～1945年』沖縄タイムス社、1991年3月。

原忠順應侯『有悔堂遺稿』原忠一発行、1926年8月。

西里喜行『近代沖縄の寄留商人』ひるぎ社、1982年5月。

比屋根照夫『アジアへの架橋』沖縄タイムス社、1994年10月。

比屋根照夫『近代沖縄の精神史』社会評論社、1996年9月。

三浦叶『明治の漢學』汲古書院、1998年5月。

村尾要三『志士沖禎介』春陽堂、1904年8月。

---

<sup>57</sup> 当時の沖縄学研究に関して、漢詩文分野に秀でていたのは真境名安興である。真境名自身も漢詩作品を多く残しており、『真境名安興全集』第4巻に作品が収録されている。また、台湾帝国大学に赴任した久保天随は沖縄を訪れた際に沖縄を題材にした作品を多く詠んでおり、それは『琉球游草』に収録されている。その中には、真境名との交流があった漢詩などもあり、当時の沖縄学研究者との交流が窺える。このことに関して、上里賢一「久保天随『琉球游草』について」（『第二回琉中歴史関係論文集』琉中歴史関係国際学術会議実行委員会、1989年3月、17～56頁）を参照されたい。